

中国広西壮族自治区における豚食習俗の研究

—南九州及び南西諸島との比較の視点から—

川野和昭

I はじめに

これまで筆者は、過去6回にわたり及びラオス、タイ、ベトナム北部の山岳少数民族の村を訪ね、南九州及びトカラ、奄美、沖縄など南西諸島の有形、無形を含む民俗文化との比較研究を進め、その共通性と差異とを明らかにしつつある。その中にあって、南九州及び南西諸島に見られる儀礼食としての豚骨料理の食習俗と生血の利用に関わる習俗は、東南アジアの豚食習俗と密接に繋がる極めて重要な文化要素であることが分かってきた*1。

今回は、その視点で過去の調査地域の東側に連続して位置する中国・広西壮族自治区及びそれに隣接する雲南省東南部の少数民族の間に見られる豚の食習俗を調査をすることで、これまでの成果が示す南九州及び南西諸島の民俗文化との文化的な繋がり、広がりをもさらに明確にしようとするものである。

本研究は、中国・広西壮族自治区の南寧（ナンニン）をベース基地として、ベトナム国境地域に住む少数民族の村を訪ねて、村人からの聞き書きを中心に、写真撮影等による現地調査を試みた。具体的には、焼畑稲作の播種・始食米・収穫儀礼などの稲作儀礼、その他の年中行事、結婚、誕生、葬式などの人生儀礼、さらに流行病排除、病氣平癒、火難（新築儀礼含み）・水難除けなど災患防除儀礼に見られる豚食の習俗を調査した。

その調査項目は、豚の飼育方法、豚の黒色と白色、豚の解体技術、生血の調理法と食べ方とその他の用法及びその意味づけ、骨の部位名とその食べ方と食後の骨の使い方及び意味づけ等である。これらの項目について、少数民族ごとにその違いを意識しつつ、詳細な聞き書きを試みた。さらに、これらに関する有形資料（伝統的生活道具）をも合わせて調査し、可能なものについては収集し、鹿児島に持ち帰り比較研究の補完資料として活用することとした。

こうした調査研究を進めることにより、生血や骨、肉を差別する日本文化の枠を超える地域としての南九州及び南西諸島の民俗文化が見えてくることが推量される。しかも、それは、日本列島の文化は元々は同質的に全域に分布していたものが、時代の経過と共に地域的に変化したもので、すべて一つに系譜づけられると理解されている日本列島の生活習俗が、必ずしも同質ではなく、むしろラオス、タイ、ベトナム北部さらに、今回の調査地を含めた地域の山岳少数民族のそれぞれの習俗に個別に対応する文化であることが見えてくる可能性が期待される。それは、豚に限らず牛、山羊、犬、鶏などの家畜の食習俗はもとより、これまでの民俗の分布そのものを問い直す契機になると思われる。

今回の取り組みは、さらに東側の広州、福建省の調査に繋げる過渡的なものであり、最終的には南九州及び南西諸島という地域の文化的位置を明らかにし、日本列島の文化の枠組み、構造、成り立ちについて、新たな「海上の道」の考えを提示していくことを目指そうとしたものである。つまり、南九州及び南西諸島の地域で明らかにされ蓄積された民俗学の成果を、東南アジア北部山岳地帯及び中国南西部の少数民族の文化の視点で読み直し、また、その逆の視点で東南アジア北部山岳地帯及び中国南西部の少数民族の文化をみていくという双方向の眼差しで比較することで、国境を越えた文化を捉える可能性と、日本列島の文化の多様性を解きほぐす、南九州及び南西諸島の民俗文化の重要性を提起してみたいのである。

II 調査事例

以下、今回、村を訪問して村人から聞き書きした事例を、項目ごとに整理をしながら紹介し、これまでの成果との比較検討を試みてみたい。

なお、調査期間は、2002年12月15日から2003年1月17日である。

1 正月豚の食習俗

(1) 広西壮族自治区大新県全茗鎮上馬村新芭屯（壮族）

豚のことをムーと呼ぶ。旧暦12月23日に家ごとに、1年年間養ってきた豚一頭を正月用に殺す。殺した当日は肉や内臓を煮込んで、その上に生血を垂らして直ぐに食べる。大晦日にはタータン（先祖を祀る棚）に、トンムー（豚の頭）を供える。その夜は、肉の付いたパイクアツ（肋骨付き肉）を野菜と油で炒めてたもの、鶏、魚の料理を家人全員で必ず食べなければならないという。

正月4日には、親戚の者が訪問してくるので豚や鶏の料理を振る舞う。先祖はこの日にあの世に帰るので紙銭を焼いて持たせて帰す。

(2) 広西壮族自治区大新県恩城郷恩城村樓眼屯（壮族）

豚のことをムーと呼ぶ。旧暦12月28、29日に自分の家で1年間養ってきた豚1頭を殺す。喉を挿して殺し生血を採り、お湯を掛けて毛を包丁で剃り、きれいにして解体する。

先祖は12月23日に家に帰ってきているので、殺した当日、先祖を祀る棚にウォワンムー（豚の頭）と豚の生血を茶碗1杯、鶏1羽を供える。豚の頭は1時間ぐらい供えて直ぐにおろし、ナーケンムー（面皮）は剥ぎ取って塩をして2～3日おいて、その後湯がいて干して保存する。頭骨（肉付き）は煮て食べる。残りの生血は腸に詰めてソーセージにする。

当日は、親戚を呼んで肉1斤とソーセージを贈る。また、家族はカン（肝臓）とシンザン（心臓）だけを炒めて食べる。なお、カンムー（豚足）は、母乳が良く出ると言って産婦に煮て食べさせるという。

(3) 広西壮族自治区大新県全茗鎮政教村啼練屯（壮族）

旧暦12月30日に豚1頭、鶏1羽（家鴨でも可）を殺し、大晦日の夜先祖を祀る棚に、豚の頭と鶏は一体を供える。夜中の12時前に祖公廟（正月に村中の先祖の霊が集まる村全体の

廟)に同じものを持って行き供え、新年が明けたら直ぐに家に持ち帰る。

(4) 大新県那峯郷那峯村伏旧屯(壮族)

旧暦12月28~29日に豚1頭、鶏1羽(家鴨でも可)を殺し、お湯を掛けて毛を剃る。大晦日の夜先祖を祀る棚に豚の頭と一体のままの鶏を供える。祖公廟には豚を殺しましたということを示すために、豚の頭は重たいので尻尾を、鶏は一体のままを持って行き供える。これは、来年はいい年になるようにとお願いする意味と、鬼神を追い払うという意味もあるという。線香をあげてお祈りしたら直ぐに家に持ち帰る。大晦日の夜は骨付きの肉を必ず食べるものであるという。昔は、大晦日に骨付き肉を入れたお粥を炊いて食べるものであった。

(5) 広西壮族自治区碩龍県碩龍鎮碩龍村骨屯(苗族)

旧暦12月27~28日に豚1頭を殺し、お湯を掛けて毛を剃って解体する。殺した当日は、サン(内臓)や肉を煮て、それが冷えてから上に生血を垂らして混ぜて、固まったらスプーンで掬って食べる。大晦日の晩(12月30日)には先祖が帰ってくるので、殺した豚の頭と尻尾、ファン(粽)、鶏、鶏の生血を先祖にお供えし、家の入り口では線香を焚いて、爆竹を鳴らして先祖をお迎えする。爆竹は多く燃やすほどよいといい、燃えかすは掃いてはならない。正月前にその家で誰かが死んだ場合は、邪を払うといって家の入り口に鶏の血を供える。死者のない家はそれはしない。

1月4日には先祖が帰っていくので、鶏のいる家ではそれを殺し、豚の頭を下ろして家の人皆で食べる。先祖の土産に持たせるのだという。その後入り口で爆竹を鳴らして先祖を送る。燃えかすは翌日「昨日お送りしましたよ」と言って掃く。

(6) 広西壮族自治区碩龍県碩龍鎮碩龍村育屯(苗族)

旧暦12月28~29日に豚1頭を殺し、30日に鶏を殺す。12月30日には、豚の頭、鶏、鶏の生血を供える。先祖は30日に来て、正月6日に帰る。

(7) 広西壮族自治区靖西県湖潤鎮那国村国讓屯(壮族)

大晦日の日に豚、鶏、家鴨と魚を必ず殺して、先祖の前に豚の頭、それ以外のものは内臓を取り出したそのままの姿で供える。生血は腸詰めにして湯がいて供える。豚は内臓とパイクウ(肋骨)とを取り出し、香草を腹に詰めて丸焼きにして切り取って皆で食べる。取り除いたパイクウ(肋骨)は、野菜、茸、春雨と煮てパイクウタンを作って食べる。この夜はファン(粽)も作ってお供えするが、これらを食べないと新しい年が来ないという。

先祖へのお供え物は、正月2日まで供え、2日の日には外に嫁いだ娘たちが実家に帰る日であるので、親類を呼んで祝いをし、そのとき下ろして皆で食べる。

(8) 広西壮族自治区靖西県新圩郷高見村底街屯(壮族)

「クワァ(越す)ムー(豚)チン(新しい)」といって、12月27~28日に豚1頭を刀で喉を刺して殺し、お湯を掛けて毛を剃って解体する。生血は洗面器に入れて取っておく。当日は骨付き肉を炒めたり、煮たりしてニンニクやショウガ、塩を付けて食べる。ルーツ(生血をお湯に入れて固めたもの)も食べる。

12月30日には鶏、家鴨も殺し、豚の頭と生血、鶏と家鴨をお供えする。家で供えたものを

晩ご飯前に土地廟に持って行って供えて、直ぐに持ち帰り調理して先祖にお供えして食べる。12時過ぎると土地廟にお線香をあげに行き、爆竹を鳴らす。その後、屯に一つある井戸にシンスイ（薪水）を汲みに行く。誰が一番先に汲みに行くかを競う。一番に汲んだ人に福が来るといふ。12個の餅をシンスイに一つずつ入れて、月ごとの天候を占う。沈んだら雨の多い月、浮かんだら雨の少ない月になるという。

また、この村ではある一軒の家だけが、12月23日に先祖が帰ってくるという。その家は、商売をしていて、行商に出ていて帰る途中12月23日に亡くなったといふ、それ以来23日に「ソン（贈る）ザオー（鍋）」祭りを行っている。鶏や家鴨を殺してご馳走を作り、先祖にお供えする。先祖はそこをご馳走を食べると直ぐにその日のうちに帰っていく。先祖を敬ってお鍋をあげ、先祖が年を越せば自分たちも年を越せるのだという。だから、他の家では12月23日以前には、正月準備の家の掃除や修理をしてはならない。正月準備は23日が過ぎてから行わなければならない。こうした伝承は、近くの高見村高屯にもあり、100戸数のうち10戸ぐらいの家がソンザオーを行っている。

(9) 広西壮族自治区靖西県南坡郷達腊村達棟屯（壮族）

12月23日に正月を迎えるための籠の修理を行う。12月27日に先祖にお供え用に少しのファン（粽）を作る。12月30日には家の人が食べるのに大量に作る。「クワームーチン」といって、12月27～29日に豚1頭を刀で喉を刺して殺し、お湯を掛けて毛を剃って解体する。12月30日に先祖へ豚の頭と尻尾と生血、殺して内臓を抜いた丸ごとの鶏、家鴨を供えて、それを夕食前に土地廟に持っていき、直ぐに下ろして家に持ち帰る。頭皮は、剥ぎ取って尻尾とともに塩漬けにして保存しておき、毎月の祭りにそれを出して必ず供える。頭の肉や骨は料理して食べる。脳は、蒸して年寄りや体の弱い人に食べさせる。先祖が何時帰ってきて何時帰るかは道公さんが決める。

(10) 広西壮族自治区那坡県平孟鎮平孟村下那屯（壮族）

「クワームーチン」といって、12月27～28日（大の月は28日、小の月は27日）に豚1頭を刀で喉を刺して殺し、お湯を掛けて毛を剃って解体する。生血は洗面器に入れて取っておく。当日は先祖に頭と尻尾と生血1碗をお供えし、骨や内臓、肉はスープにし、残りの生血は腸詰めにして食べる。頭と生血はこの日だけ供えて大晦日には供えない。頭の皮は塩漬けにして3日ぐらいしたら食べる。

大晦日には鶏、家鴨も殺し、メイファ（粽）、トーン（米のおこし）とお供えする。

先祖は、大晦日に爆竹を鳴らしたときに帰ってきて、お供え物を1回食べたなら直ぐ家から帰っていく。

(11) 広西壮族自治区那坡県百省郷百坎村古峇屯（苗族）

貴州省から那坡県やって来た。初めは谷の向こうの山に3年ぐらい居て、ここに来たのは那坡県に来て10年になる。元は、旧暦12月1日に正月を行った（年寄りはそういうが、若い人たちはそれを認めない）。今では、12月27日に豚を殺す。湯をかけ刀で毛を剃り、汚れを落として解体する。この時に殺す豚は黒い色の豚でなければならない。12月30日には粽も作

る。

(12) 広西壮族自治区那坡県那隆郷坡芽村波平屯（藍瑤族）

12月26～28日の頃に豚を殺す。元々は黒色の豚であったが今は白色であったりする。白い豚は10年ぐらい前から売り物として飼うようになった。殺した日には頭と尻尾を先祖にお供えする。30分ぐらいお供えしたら下ろして調理して食べる。生血は腸詰めにして食べる。大晦日にはレイクラー（肉付きの肋骨）や鶏、コンチョンパー（粽）、ミーホラー（糯米のおこし）、ガンコウ（干し果物）などを先祖に供える。

先祖は、大晦日に帰ってきて15日に帰るので、シーニュッサムノム（正月15日という意）とって大晦日に供えたお供えはこの日に下ろして食べる。

(13) 雲南省広南県八宝鎮百楽辦事処龍達村（白苗族）

12月25日の頃にボージェー（年の豚）を殺す。頭や尻尾、生血を先祖に供えることはしない。大晦日の日にテーブルの上にガイボー（骨付き豚肉）、ガイ（赤い羽根の雄の鶏）、オー（家鴨）、トゥジャウ（焼酎）、チョブレイ（米で作った焼酎）、モー（ご飯）を供えて、その前で年寄りが先祖を呼ぶ。「ボーヨー（守ってください） トンボチェノー（年越しの豚を殺す） ネチャロー（家に戻ってきて） シヤツラノー（を守ってください） ポフボーヨー（守ってください） ヨヨーン ウオトノー（食べるものもあるように） ウオトホー（着るものもあるように） チェンヨンプー（守護して） ヨンナイネー（ください）」というようなことを唱えながら、先祖を呼ぶ。

先祖は、1月3日に帰っていく。その時には、鶏を1羽殺し、1月2日に殺したブラチョン（殺す子豚）を土産に持たして、爆竹を鳴らして送ってやる。ブラチョンがないときは12月25日のボージェーの肉を持たしてやる。

(14) 雲南省広南県八宝鎮百楽辦事処那讀村（白苗族）

12月20日を過ぎて、豚の日を避け、豚よりも大きい動物の日を選んで豚を殺す。このような日選びをするのは、今年の豚より来年の豚がより大きくなるようにという意味がある。トンボージェー（年の豚）と言って、解体したら頭と尻尾を先祖の前にお供えする。1時間ぐらいしたら下げて、頭皮は剥いで塩漬けにして保存する。

大晦日の日には、トンボージェーの骨付きの肉、鶏、粽、焼酎、ご飯を供える。年寄りには、鶏の肝臓を食べさせる。

(15) 広西壮族自治区龍州県下凍鎮春秀村禮隆屯（壮族）

クワームークーネン（豚を殺して年を越す）と言って、各家々で豚を殺した。お湯をかけて毛を剃り、解体する。頭と尻尾はその日に先祖の前にお供えする。生血は腸詰めにして煮て食べる。頭皮は、ヌッター（塩漬けして干したもの）にして正月に食べる。大晦日にはビンクー（揚げ餅）サーカオ（長四角の餅）、カトム（肉入りの粽）、ロクヌー（骨付き肉を煮たもの）、鶏（丸ごと湯がいたもの）、鶏の血（湯がいて固めたもの）を先祖に供える。

(16) 広西壮族自治区上思県南屏瑤族郷米強村百管屯（過山瑤族）

タイトンクーネン（豚を殺して年を越す）と言って、12月24日から26日の間に各家豚を殺

す。刀で喉を刺して生血を取り、お湯をかけて毛を剃り、毛が取れないときは火で焼く。生血は、蒸した糯米と混ぜて腸詰めにして食べる。頭と尻尾とは、殺した日に1時間ぐらい先祖にお供えする。大晦日にはアヌ（豚肉）、ザイン（鶏）、ジュー（粽）、チュー（焼酎）、煙草を先祖にお供えする。正月3日までは、毎日鶏を殺して朝昼晩3回調理して供える。鶏以外の供えものは取り替えても、取り替えなくても良い。3日に供え物を下げるのが、昔からの習慣である。

(17) 広西壮族自治区上思県南屏瑶族郷常龍村板林屯（過山瑶族）

タイトンクーニャン（豚を殺さないと言わないと年を越せない）と言って、12月24日から28日の間に各家豚を殺す。昔は、先祖の霊は正月1日から15日まで家にいると言っていた。15日には鶏を殺して供えていた。

(18) 広西壮族自治区上思県南屏瑶族郷樂村塩良屯（過山瑶族）

12月25日頃に良い日を選んで、豚を殺す。刀で喉を刺して殺し生血を取り、湯をかけて毛を剃り解体する。先祖には豚を殺した日に、剥いで湯がいた頭皮と湯がいた心臓と、白紙に染みこませた生血をフンワン（線香台）に供え、1時間ぐらいで下げる。昔は、大晦日に頭皮と心臓と白紙に染みこませた生血、殺した鶏、サンチイー（1ヶ月ぐらい薫製にした小さな野鳥）、小さな川海老も供える。先祖は豚を殺した日に帰ってきて供え物を食べたら直ぐに帰る。もし供え物をしないと、鬼神となって先祖が戻ってきて、家の者を病気にしたりして、家に悪いことを起こさせる。また、お供えしたものは家の者だけで食べるもので、他人に与えるとその家の運が逃げていくという。今では、大晦日には線香をあげるだけである。正月1日から粽と焼酎をお供えする。

(19) 広西壮族自治区上思県南屏瑶族郷平村（壮族）

クワーモムー（豚を殺す）クーネン（年を越す）と言って、大晦日に豚を殺す。鶏も殺し、粽も作る。豚の頭と尻尾、生血、鶏、粽を先祖にお供えし、ポウタウトウトウ（親土地）という村の土地の神を祀るドウトイー（土地公廟）にも持って行きお供えする。ドウトイーのある森はティーンと呼び、風水をみて村の外の少し高めの所を選ぶ。普段（祭り日以外の日）は入ってはいけないし、木も伐ってはいけない。また、村人以外の人のはいることも厳禁である。この禁を破ると鬼神からひどい罰を受ける。子どもが死んだり、商売がうまくいかなくなったりする。森は龍みたいなもので、禁を犯すことは龍を怪我させることになるからであるという。また、土地の神であるポウタウトウトウは、フンタオイーソン（風調雨順）を管理するといひ、森の中にはドウトイーを建てた人々の名前が刻まれたに石碑があるが、その人々は祀られているポウタウトウトウの後裔であるという。

2 正月2日の小豚供犠と食習俗

(1) 雲南省広南県八宝鎮百樂辦事処龍達村（白苗族）

その家で雌豚（母豚）が1年間に産んだ子豚のうち1頭だけ売らずに残しておき、1月2日に殺す。この儀礼をブラチョン（殺す子豚）と呼び、必ず黒い子豚でなければならないと

言い、白色の子豚を殺すと不幸が来る。これからの1年間、家の豚が順調に育ち、順調に売れますよという意味で行う。豚小屋から子豚を引き出し、竹の棒で叩きながら、家の周りを左回りに3回廻して、正面の入り口から家の中に入れて、ドンジャン（中央の間）で殺す。刀で喉を刺して血を出し、火で毛を焼いて剃って汚れも落とし解体する。この方法が最も古いやり方で、ブラチョンは湯をかける方法でやってはならない。子豚を殺すときには決して漢民族の言葉を使ってはならない。ブラチョンは、丸ごと煮て細かく切って家人皆で食べ尽くしてしまう。肉切れを家の中から持ち出してはならない。

(2) 雲南省広南県八宝鎮百楽辦事処那讀村（白苗族）

その家で雌豚（母豚）が1年間に産んだ全部の子豚が順調に育ったら売りますが、生まれた子豚の中に1頭でも乳の飲みが悪かったり、育ちが悪かったりした場合は、その1頭だけは売らずに残しておき、1月2日に殺す。これは黒い豚でなくてはならず、白い豚を殺すと不幸が来ると言って絶対禁じられている。1回これを行った家では、その母豚が子豚を産む間は毎年続ける。その日に山から径30cmぐらいの木を伐ってきて、豚小屋の入り口の幅の長さに切りそろえて二つ割りにする。子豚を小屋から引き出し、その片方の割木で叩きながら家の周りを左回りに3回廻して、正面の入り口から家の中に入れて、ドンジャン（中央の間）で叩き殺す。殺したら残りの割木で豚小屋の入り口を塞ぎ「これから先は乳を飲まないような豚は出ないよ」と唱える。刀で喉を刺して血を出し、火で毛を焼いて剃って汚れも落とし解体する。この方法が最も古いやり方で、ブラチョンは湯を掛ける方法でやってはならない。ブラチョンは、煮た頭、内臓、骨付き肉を椀1杯ずつ先祖に供える。家の中で皆で食べ尽くしてしまう。肉切れを家の中から持ち出してはならない。

3 結婚式と豚の食習俗

(1) 広西壮族自治区大新県那峇郷那峇村伏旧屯（壮族）

結婚の相手は親が決めるが、自分で気に入った女性がいたら紹介してもらう人を頼んで、お互いの見合いの場を作ってもらう。男性の方から何かお礼の品を持っていき、デインホン（定婚）を行う。女性側では、「下の兄弟姉妹がまだ若いので」とか「ようやく1人前になったのに直ぐに嫁にやるのはいやだ」とか言って、男性側の申し出に対して返事を長引かせる。結婚の日取りを決める。その後は、結婚の日まで男性が女性の家に加勢に行く。

結婚式の当日、夫側から嫁側に豚1頭を贈る。嫁側ではそれを殺して、先祖の前に頭と生血を供える。当日お昼過ぎに、夫側から嫁側に迎えに行く。迎えには、夫、両方揃っている夫婦（一方が欠けている夫婦が混じると不吉）が行くが、片手には卵を、もう片手には新しいタオルを持って行く。卵は、途中で雷が鳴り出したときに投げ捨てて、「雷公」を払う。タオルは、嫁を夫の家に導くという意味がある。豚を殺して嫁側で祝いをして、その豚を皆で食べる。

嫁の側からも、親は送っていかず、嫁の兄弟姉妹が送っていく。夫の家でも豚を殺して先祖の前に頭と生血を供える。夫の家に着くと正面の入り口から入る。嫁が来ると夫側の人々

は家の外に出て、道公さんが夫と嫁だけを入れて先祖にお祈りをする。その後に入ってくる。これで嫁が夫の家の人になるという。

(2) 広西壮族自治区凭祥県上石郷油隘村油隘屯（壮族）

昔はオッポー（歌の掛け合い）で男女が知り合うことが多かった。山の畑でオッポーをするのが本来の形で、男性が好意を抱いた女性に「山に行って歌を歌おうよ」と言って誘うものであった。男から歌い掛け、女性が応答の歌を歌い返す。また、オッポーを行う特別の機会は正月、旧暦5月13日などの祭りの日がある。両方が合意したら双方の両親に紹介して、同意を求める。結婚が決まると女性の側から男性側にお礼を求める。男性側は、ケッコムー（結婚豚）を400斤贈る。女性側では、その豚を殺して頭と尻尾と内臓、生血を先祖にお供えて、「良い結婚を守って欲しい」とお願いをし、皆で食べる。新郎の家でも同じように豚を殺して先祖にお供えする。

(3) 広西壮族自治区上思県南屏瑶族郷常龍村板林屯（過山瑶族）

男女の出会いの場は、アイユン（歌の掛け合い）が80%で、残りは親が決める。アイユンは、男性の方から歌い掛け、それに対して女性が応答の歌を歌い返す。歌で2人が合意したら、女性が男性の家を訪ねる。男性の親に気に入られたら2、3日くらい泊まることもある。女性が家に戻ると男性側がブント（両家を繋ぐ人）を頼んで、双方の親が顔を合わせて結婚の日取りを決める。男性側からソン（贈る）ラン（礼）として女性側に豚120斤、米120斤、肉120斤を贈る。嫁の家では「マイシャー（嫁に出す）トウユウ（酒）」という祝いを行う。豚の頭と鶏1羽を先祖の前にお供えて、紙銭を燃やして結婚の平安を祈る。男性側からの迎えの人々を焼酎責めにし、出来るだけ帰さないように長く引き留め、暗くなる前になったら帰す。嫁は、赤い布を被って顔を隠して家を出る。

嫁側からの贈り物は、布団1組、蚊帳1吊り、ヤンギャン（木製の服入れ用の箱）である。夫側の人々は村の入り口で迎える。夫の家にはいるとき入り口の外で、竹で編んだ鍋の蓋を嫁の頭に被らせてから中に入れる。鍋の蓋がないときはナツシャン（網代編みの浅底箆：鹿児島のパラと同じ）を被せる。これは、嫁がこの家の人になるという意味で被せるもので、鍋蓋を用いる煮炊きや、ナツシャンを用いる米の脱穀調整などの仕事が女性の仕事だから、これからあなたの仕事になるよという意味で被せるのだという。夫の家でも豚の頭と鶏1羽を先祖の前にお供えて、紙銭を燃やして結婚の平安を祈る。

4 葬式と豚の食習俗

(1) 広西壮族自治区靖西県三合郷三灵村個迳屯（壮族）

ここでは、2002年12月23日夕刻5時に、89歳で老衰で死亡した老女の葬式（ピータイ：鬼・死んだ）に、2002年12月24（火）～26（木）にかけて参加させてもらい、実見しながら聞き書きした事例を紹介したい。項目の頭に記した時刻は、現地時刻である。

2002年12月24（火）

17：47 新水汲み 靖西県三合郷那達腊村達棟屯（壮族）からの帰途、三合郷三

灵村個迄屯（壮族）を通りかかると、パイカオ（白い木綿布）のゲンカオ（頭巾）を被り、さらにその上をチャオ（布）で覆い、白のフーカオ（上着）、白のファーカオ（ズボン）を身に付けた人々が、赤い布の幡を先頭に一本の長い白布で手を繋いで行列を作って歩いて家に入っていく。これは葬式に違いないと思い、ガイドの陳氏を使いに出し、見学しても良いか打診を入れる。「大往生で、目出度いので見に来て良い。写真も撮影して良い」という許可が出たので、家に寄せてもらう。聞くと、行列は家の近くの湧水池に新水を汲みに行った帰りだったという。高床の家で入り口にはコンクリート製の7段の階段がある。階段上の梁には青い柴が吊り下げられ、外から家に入るときは階段下で手や口を洗って清めている。階段にも床にも総て稲藁が敷き詰めてある。人が跪くために着ている衣服が汚れるのを防ぐのだという。

18:05 新水による顔拭き 参加者全員が新水を付けた木の柴で死者の顔をなでて、拭いている。その後、一晚寝ずにお経を上げて、あの世にいけるように祈る「超渡の儀」という儀式をするのだという。翌日午前10時頃に豚を殺すというので、それに間に合うように再度訪ねると約束して、那坡のホテルを向けて村を後にする。

2002年12月25（水）

9:31 庭に置かれた牛馬の作り物

村に着くと階段下横に白い牛（藁製）・赤い馬（竹籠製）・草人（藁人形）・家の模型が置いてある。これらは埋葬時に墓で燃やし、死者に死後の世界に持って行ってもらうもので、死後の世界でも生前と同じように生活してもらうためのものであるという。草人（藁人形）は、死者を象ったものである。

家の中には、赤い紙で覆われているクウメイ（天鳥舟）と呼ばれるお棺が置かれ、頭を家の奥に足を出口に向けて遺体が入れてある。頭の上には、殺されて羽がむしられ、湯がかれた愛鶏（赤い羽の雄鶏）が置かれている。

9:54 ヨンピャー

お棺の前に作られたゾンサイ（祭壇）には、ドウ（帽子）2つ、豚肉1皿、豚の生血2皿、鶏（昨晚12時過ぎ、遺体をお棺に入れる際に殺した赤くきれいな雄鶏）の生血、さらに、その前に置かれた円卓の上に、故人の印章を載せた米1碗、線香3本を立てた米1碗、紙銭3枚を載せた米1碗を置く。アイタオ（哀悼）と称する黄、青、白3色の旗を持ち、喪主、娘をはじめ親類の女性たちが藁の敷かれた床にひれ伏す。喪主（息子）が、豚を供犠するための白布を巻いた刀をくわえ、四つんばいになり、お棺の周りを左回りに廻る。

9:54

喪主が口にくわえていた刀を祭壇に供え、道公（道教のシャーマン）が経文を唱え、線香を供える。

10:09 豚の屠殺

お棺の前に供えられていた刀が青年に渡される。お棺の置かれた部屋の階下に飼われていた白い豚が引き出される。爆竹が鳴らされる中で、喉を切り、生血を碗に2杯取り、お棺の

前と道公たちが控える部屋の先祖を祀る祭壇に供える。残りの生血は鍋に取り家の中に運び込まれ、米の粉を混ぜ込む。翌日、死者に供えるために、シーローという赤い蒸し菓子を作るのだという。豚が引き出されると、女たちが死者との別れを悲しむハイ（歌）を泣きながら歌う。その内容は、「苦労をいっぱいして子供を育ててきたのに、今日からはもうこの家には居ることができない」などということであるという。つまり、死者があゝの世へ行ってしまうことを悲しむ歌で、いわゆる泣き女による泣き歌である。豚の解体は漸次続けられる。

〈豚の解体と内臓の作り物〉

沸騰したお湯を掛けながら刀で体毛を削り取り、汚れを取り除く。仰向けにし、胸を開き、尻の方へ腹を割いていく。食道を切り、肺臓と心臓を繋げた状態で引き抜き、尿道や直腸を傷つけないように肛門の周りを慎重に切り分け、内臓全体を取り出す。

その内臓によって次のような作り物を作る。

- ・チンフォン（金鳳） 食道を真っ直ぐに立て、根元に肺を羽のように広げ、心臓を体に見立てて置く。（サンチン：山珍：山の珍しいもの）
- ・イトゥー（玉兎） 胃を膨らませ眼などを墨で描く。（サンチン：山珍）
- ・チンカイ（金亀） 肝臓に眼や甲羅などを墨で描く。（ハイウェイ：海味：海の珍味）
- ・イーロン（玉龍） 大腸や小腸に眼や鱗などを描く。（ハイウェイ：海味）

その他の供え物として次のようなものも準備する。

- ・ハイミエン ニャータフー（おから）の上に花を挿したもの。
- ・ドーケン 豚、鶏を湯がいたもの。
- ・テンレーン 黒糖
- ・ベーン ビスケット
- ・ターン 飴

10：20 お棺の前のパプソン（円卓）に供えられた紅白の人形と箆おきとヒパプソン（円卓）の上に3個の茶碗に白米が盛られ線香が3本ずつ、右二つには10元札が入れられている。さらに、手前右に赤水、左手に黒水の入った茶碗が置かれ、両碗の間に死者が生前使用していた箆おきを渡しその上に桴ひが置かれる。アイタオ（哀悼）と称する黄、青、白3色の旗が集められ、銅鑼や鉦が鳴り出す。死者の娘をはじめ女たちが、左回り、右回りの二手に分かれてお棺の周りを這って廻る。喪主をはじめ男たちが昨晚に撒かれたトウモロコシを拾う。多く拾うほどこの家が栄えるという。

10：39

女たちに線香が1本ずつ渡され、道公に従って立ったり跪いたりして3回拝む。道公の読経が始まる。続いて紙を燃やし、水で払いながらお棺の周りを左回りに1回廻る。

10：48

女たち二人がパプソンの左右に向き合って座り、白い人形と黒い人形を何回となく取り替える。

11：11 死者の娘のハイ

腹這いになった娘を先頭に、次に道公の後ろに女たちが立って続く。道公が一言唱えると、死者の娘が鳴き声でハイを歌う。娘は亡くなった母を呼んでいるのだという。23分間ぐらい同じ行動を繰り返す。最後に、娘が焼酎を供えてお棺を拝み、続いて他の女たちも同様に拝む。



お棺の前に供えられた豚

11:48 ムーパプソン（豚円卓）の供え
パプソン（円卓）の上のお供え物を下げる。さらに、卓を1つ追加。ムーパプソン（豚円卓）が担ぎ込まれ、頭をお棺に向け円卓に前足を掛けて供える。さらに、背中にワンヨウ（腹膜）を被せ、その上にダツマイ（臍臓）を乗せる。ワンヨウは魚獲りの網の代わりに死者に贈るもので、ダツマイは一番美味しい部位だから死者に贈るのであるという。アヒルも1羽供えられる。

11:53

銅鑼と太鼓が鳴り、人々が祭壇に点々と焼酎を垂らす。祭壇の前に垂らした緑の紙に書かれた20の神にあげているのだという。

11:57

皆立ち上がり、喪主（息子）と男の近親者3人にスプーンが配られ、焼酎が注がれる。喪主たちは2人ずつ左右二手に分かれて、ムーパプソンの両脇に進み、祭壇に焼酎を垂らす。これを3回行う。近親者の女性4人が同じことを繰り返す。終わったら頭の白布を取って礼をして下がる。



お棺の前に供えられた山珍と海味と豚

12:25

チンフォン（金鳳）、イートゥー（玉兎）、チンカイ（金亀）イーロン（玉龍）、ハイミエン、ドーケン、テンレーン、ペーン、ターンをムーパプソンの左脇にお供えする。これも死者にあげるのだという。

12:38 2回目の儀式の開始

爆竹が鳴り、銅鑼、太鼓が鳴る。2回目の儀式の開始を告げる合図である。デンコーン（道照）のスプーンに油が入れられ、灯明が灯され、アヒルが1羽供えられる。女たちが泣きながらハイを歌う。「あなたは、これまで子供たちのことで苦勞してきたのに、もうこの家には居られない。それが悲しい」と歌う。泣き止むとお棺の周りを左回りに1回這って廻る。

13:36

道公がスイタオ（龍の文様の刺繍されたガウン）を身に着ける。ムーパプソン（豚円卓）の左手の卓に白米を盛った茶碗3個（中央の茶碗には線香3本立てられる）とスプーン3個が供えられ、さらにその前に白布が敷かれ、お経の本が供えられる。女たちはクウメイ（天鳥舟：お棺）を囲んで座る。

13:47

道公がデンコーンの灯明を一つずつ蠟燭で祀って跪くと、他の者もそれに従って跪く。

14:08

道公のお経が終わると、皆手に持っていた線香の火を消す。道公はスイタオを脱ぐ。お米を盛った茶碗やスプーンが撤収される。



お棺の周りを這って回る会葬者



お棺に取り縋って泣く女たち

15:02

チンフォン（金鳳）にタバコを吸わせ、デンコーンに灯明を付け、道公がお経を唱えて拝み、喪主、甥、孫（孫）の3人が道公に従って拝む。女たちは床に座している。

15:22 紙銭を燃やす。

道公のお経が始まり、太鼓、摺り鉦が鳴りだし、祭壇の下で紙銭を燃やす。



死者の娘の婚家から供えられた豚（左）

14:18 クウメイ廻り

道公がお経を唱えながら左回りに廻り出す。喪主、男たち、女たちの順。女性のうち、死者の娘と息子の嫁の二人は這って廻りながら、道公のお経が一節終わるごとに、「メーオー メーオー ユーポー ハウ（お母さんお母さん どこにいるんですか）」と、泣きながらハイを歌う。

喪主（息子）と死者の甥の二人は、死者に孝行をするという意味でターン（杖）をついている。

14:42 墓掘り

家の裏の畑に墓穴を掘る。幅90cm、奥行き260cm、深さ60cmの大きさで、方向は南西の方向にある尖った山（死者に合った山）に足を向けるように掘る。

15:23 娘の婚家からの豚のお供え

デンコーンが下げられ、そのスプーンの灯明は祭壇に供えられる。娘の嫁ぎ先からのムーパブソン（豚円卓）とサンチン、ハイウェイが左手の卓に供えられる。

16:41 幡が作られる。

縦3疋、横1.2疋の白布の中央に「恵愛難意」、右肩に黄色い紙に書いた「故岳母返老毛寿終沸黄門潘氏孺人千古」、左下に黄色い紙に書いた「陽居孝 婿鐘騰寶 輓」の文字が見られる。

16:44 実家からの供え物

死者の実家からも供え物（籠二つのトウモロコシ、お米）が届けられる。供え物を持ってきた人たちも、お棺の祭壇の前で白布の上着を身に着ける。

16:53

娘の嫁ぎ先の男たち8人がお棺の前に並び、礼拝し額づく動作を3回繰り返す。火の着け

られた線香が、道公の部屋からお棺の祭壇へと持ち回られ、祭壇に供えられる。お棺の周りを左回りに1回廻り、道公が「イレイパイ」の声を発した後、8人の男たちは祭壇に向かって、跪いては額づいて9回礼拝をし、再び立ち上がり同じ行為を3回繰り返す。拝み伏していると、道公から杖が与えられ、帽子が被せられる。道公が祭壇の前で供え物の名前を呼び、帽子を被せられた男が箸でその供え物を叩く。これはその供え物を死者に贈り、受け取ってもらうということである。これが終わり、さらに道公の「イレイパイ」の声に従って7回の礼拝をし、再び供え物を叩いて死者に贈り、受け取ってもらう。

17:06

道公の読経が始まる。喪主は体を横にして寝ている。これは哀悼の意を表しているのだという。その他の参列者は全員が額づいている。これは死者の娘の嫁ぎ先の人々に感謝をしているのだという。

17:17

お経が終わると、道公の先導で、お棺の周りを左回りに1回廻り、道公の「イレイパイ」の声に従って9回の礼拝をし、再び立ち上がり同じ行為をもう1回繰り返す。撞り鉦、太鼓が鳴り、死者の娘の嫁ぎ先の人にスプーンが渡され、焼酎が注がれ立ったまま礼拝し、焼酎を豚に掛ける。これを3回繰り返す。

17:24 白布の配布

伏している死者の夫側の人々の肩に白布が配られる。頭には白布のハチマキをしている。

17:28 豚への焼酎あげ

爆竹が鳴らされ、死者の夫側の女たちにスプーンが渡され、焼酎が注がれ、立ったまま礼拝し、焼酎を豚に掛ける。これを3回繰り返す。再び、爆竹が鳴らされる。

17:35 娘の嫁ぎ先からの供え物の撤去

死者の娘の嫁ぎ先から供えられた豚や米、焼酎などが下げられる。

17:38 豚の解体

豚の首が切られ、胸、腹側から背骨が割られる。背骨の割り方は、背骨に1本の刀を打ち込み、その刃に沿ってもう1本の刀を切り込み、真二つに割るという方法で行われる。

17:43 実家からの供え物

死者の実家から贈られた籠には、豚の頭と尻尾、鶏と豚の肉が入っており、娘の嫁ぎ先からの豚が下げられた円卓の上に供えられる。

17:48 イレイパイ

死者の実家の男2人が帽子を被り、杖をつきながらお棺の周りを左回りに1回廻り、道公の「イレイパイ」の声に従って9回の礼拝をし、さらに同じ行為を繰り返す。焼酎を目の前にこぼす。次に、左回りに1回廻り、道公の「イレイパイ」の声に従って9回の礼拝をし、豚などの供え物を叩く行為を3回行い、最



2本の刀を用いた背骨割り

後にもう1回左回りに廻り、スプーンに注がれた焼酎を、豚の背中に掛ける。これが終わると、2人の男には白布が贈られる。

17:55

爆竹が鳴らされ、再び、死者の実家の女たちにスプーンが渡され、左右に分かれて這ってお棺の周りを廻り、拝んで供え物に焼酎を掛ける。これを3回行う。終わると白布が贈られる。

18:00 豚の頭の撤去

死者の実家から供えられた豚の頭が下げられる。

18:03

喪主たちが祭壇の前に並ぶ。線香を持ち、礼を3回して伏せる。線香と杖、帽子を取り去る。新水で手を洗い、左回りに1回まわり、イレイパイ、イーエンキーサンパイ、イーエンキーナンパイという礼拝をそれぞれ3回ずつ、合計9回の礼拝を行う。次に、同じことを2回行い、2回目の終わりに浅底平箆を捧げて、それを叩いて死者にお供えする。さらに、左回りに1回まわり9回の礼拝をし、紙銭を祭壇から下ろす。スプーンが配られ、お経の紙も浅底平箆に少し入れられ、豚の背中に戻され、供え物を叩いて、死者に贈る。さらに、もう一度同じ行為が繰り返される。

18:15

男も女も皆が伏している中で、道公のお経が始まる。

18:26

喪主が這って焼酎を祭壇に供える。喪主は泣いて立つことができない。

18:28 イーエンパイ、

全員が立って、男たちがお棺の周りを左回りに廻る。イーエンパイ、イーエンパイ、イーエンサンパイの礼拝をそれぞれ3回ずつ合計9回行い、浅底平箆を叩いて、紙銭とお経の紙を浅底平箆に少し入れ、供え物を叩いて、死者に受け取って貰う。再び、男たちがお棺の周りを左回りに廻る。イーエンパイ、イーエンパイ、イーエンサンパイの礼拝をそれぞれ3回ずつ合計9回行い、道公が焼酎を豚の背中に注ぐ。スプーンが配られ、それに焼酎が注がれるとお礼をし、さらに焼酎が注がれ、右手に廻り位牌に焼酎を注ぐ。元の位置に戻り再び焼酎が注がれ、今度は左右二手に分かれて位牌に注ぎ、元の位置に戻り礼をして、床にひれ伏す。これをもう1回繰り返す。

18:36

死者の実家側の男たちが線香を持って拝む。焼酎の注がれたスプーンを受け取り、立って礼をする。これを三回繰り返し、その後伏していると白布が掛けられ、それを貰う。

18:41

道公たち4人がスプーンを持って、二人ずつ左右二手に分かれて、お棺の周りを3回廻る。終わると爆竹が鳴らされる。男たち4人が立って3礼、座して三礼を三回繰り返す。残りの人々も子供まで次々に同様に礼拝する。

18：47

親戚の女性たち6人が、お棺の前でスプーンを持って、立っては礼、伏しては礼を9回繰り返す。残りの女性たちも総て同様に礼拝をする。

18：57 夕食

夕食が始まる。湯がいた豆腐、豚の皮付きの三枚肉、骨付き豚の肉が配られる。

19：22 送地上路

道公たちが肩に白布と藍染め布を担いで、それぞれ死者の息子を伴に連れて、左回りに廻る。これは「送地上路」という儀礼である。この直前に喪主から供えられた豚は、首を落とされ、総ての供えものが下げられていた。

19：28 インルー

お棺の周りを左回りに三回廻る。これをインルー（引路）という。

19：31 白布敷きと解体

道公達の居る部屋からお棺の周りに左回りに白布が敷かれ、喪主以下皆がその上に座り、ひれ伏す。道公の読経が続く。それが終わると白布が取り除かれ、豚の解体が始まる。

19：45 メーオー（お母さん）

豚の解体が始まると同時に、死者の娘ともう1人の女性が、道公の唱詞に応えるように「メーオー（お母さん）」と叫びながらお棺の周りを左回りに這って廻り、その後を全員がついて這って廻る。約30分ほど廻っている。

その脇で豚の背骨が割られていく。豚の解体の順序は、①背骨を二つに割っていく。その方法は、背骨の内側の中心線に一本の包丁を立てて、もう一本の包丁を当てて滑らすように打ち下ろして真っ二つに割る。こうすることで骨の髄を食べやすくしていると思われる。足の骨も同じ方法で二つに割っていく。②センター（肩胛骨）の付け根、腰骨の付け根の所から切り落とし、片平を三つの部分に分ける。③ツウキョウ（前後の付け根から先の足部）を付け根から切り落とす。④パイカー（肋骨）を背骨付で切り分ける。⑤肩部やハオタイ（臀部）の肉を切り分ける。⑥センターを取り出す。

20：35

パイカーもセンターも肉も大鍋で湯がく。

20：53

ツウキョウは火で焼き、その後水の中に入れて爪の先まで黒こげを落とす。脂身は鍋で炒ってラードを取る。

21：30

祭壇の供え物が取り除かれ、天井から下げられていた紙幣も取り除き、祭壇の上で燃やされる。

21：38

祭壇を取り除き、道公の読経の中で、女性たちが供えられていた物を壺に詰める。女性たちがお棺に向かって伏し拝んでいる。その後立ち上がり、道公の読経の中で男たちも女性た

ちもお棺の周りを左回りに廻り、それが終わると家の入り口に向かって礼をし、床に腰を下ろす。

21:59

再び、お棺の横に祭壇が設置され豚の頭、豚の三枚肉、鶏、白米とが供えられる。その前で、道公が二枚の半月状の卦木を投げる。両方とも背の曲面の方が出たら紙銭を燃やす。二枚とも平らな面が出るまで投げ、平らな両面が揃ったら刀で豚の頭の鼻先から眉間まで切れ目を入れる。鶏も二つに切り分ける。これは、死者の靈魂を肉体と分離する術であるという。

お棺の前の床に浅底の平箒が置かれ、中に白米が盛られ人の形を作る。その人形の胸の上に白い木綿糸を通した竹管が立てられ、その上に紙銭を乗せる。道公が刀で紙銭、竹管、木綿糸を二つに断ち割る。その後、白米を左右二つに分けては混ぜるといふ所作を7回繰り返す。これも、死者の靈魂を肉体と分離する術であるという。

22:17 送天堂

豚の頭、豚の三枚肉、鶏、白米が、祭壇から下げられる。家に入る階段の上の梁に刀を掛けて祈り、道公が1人は刀を、1人は幡を持ち、もう1人が人形を作った白米を包んだ白布を入れた浅底の平箒を担いで、お棺の周りを左回りに3回走って廻る。3回目が終わると、刀を持った道公は、お棺の横の鋤の刃を持っている刀で叩き、家から退出する（1分ぐらいして再び帰ってくる）。幡を持った道公は家の入り口で祈りをし、浅底の平箒は家の外に投げ捨てる。これは「送天堂」といい、霊を天上のお堂へ送る儀礼であるという。

22:24

播り鉦と太鼓が鳴り出す。女性たちはお棺にすがって泣いている。

22:30

階段下の庭で火が焚かれる。女性2人が供え物を入れた壺と、死者の着物を入れた袋を担棒で担ぐ準備をして、階段下の牛、馬、人形の横に置かれる。

22:47

再び、道公を先頭にお棺の周りを左回りに廻る。

23:05

肩から足の骨は、総て肉付きで切り分ける。これをドッヌー（骨付き肉）と称し、醤油味で煮込む。これは、埋葬が済んだ午前零時過ぎ以降に皆で食べる。

23:14

死者の実家から供えられた豚の頭、豚肉、鶏、白米3椀、スプーン3本が、お棺の死者の頭の方の前に置かれた円卓の上に供えられる。中央の白米には3本の線香を立て、1元札が供えられる。死者の実家の女性2人がスプーンに焼酎を注ぎ、左右二手に分かれ、跪いてお棺の周りを左回りに廻り、お棺の左右に伏している。

23:26

白布をお棺の足下に敷き、上に赤布を掛ける。

23:32 后継有人

天井の梁の上に置かれていたトウモロコシの入った浅底の平箆が下ろされ、2人の道公と喪主がそれを持って、赤い幡を持った道公2人を先頭に、5人でお棺の周りを左回りに3回廻って、それが終わったら中のトウモロコシを床に撒く。女性たちは競ってそれを拾い集める。これは、後継有人と呼ばれる儀礼で、死者に対して、あなたの後を継ぐ子孫がいますよということを死者に表示する儀礼であるという。

23:36

トウモロコシ拾いが終わると浅底の平箆は元の所に戻される。



墓穴の横に供えられた豚の頭部



お棺の足元に置かれ埋葬される供物の壺



会葬者に振る舞われるドゥヌー(手前右)と豆腐(手前左)



ドゥヌーを食べる会葬者

23:40

道公を先頭に列をなして階段を下りて外に出る。それに続いて竹の松明を灯し、幡、お棺、最後に死者の実家から供えられた豚の頭、豚肉、鶏を入れた籠、供え物を入れた壺と衣類を入れた籠、人形、牛、馬、家などの模型などが列になって、墓(埋葬場所)に向かう。雨が降っておりドロドロの中を竹の松明の明かりで進む。

墓に着くと、道公たちと喪主が埋葬穴の周りを左回りに廻り、道公3人が穴を跨ぎ、竹の松明で穴の中を清める。足を聖なる山の方に向けてお棺を穴に沈め、その足下に供え物が入った壺を置いて土を被せる。穴の横には死者の実家から供えられた豚の頭、豚肉、鶏を入れた籠が置かれ、線香3本が立ててある。

穴の近くの畑で死者の着ていた衣類、人形、牛、馬、家の模型が燃やされる。参列した人々は、しきりにその火を白布で自分の身の方向に招いている。皆、墓を足の方向から拜んで帰る。

家に帰り着いたら、葬式を出した家の階段下の洗面器の水で手を洗い家に入る。この水で手を洗わないうちは、他の家にも入ることは厳しく禁じられている。

00:24 豚のドゥヌー(骨付き肉)と炒められた皮、野菜との炒め物、湯通しされた豆腐、焼酎が出され、会食が始まる。

(2) 雲南省広南県八宝鎮板幕辦事処権家弄村(白苗族)

ここでは、去る12月26日に事故で死亡した56歳の女性の葬儀の一部を実見できた。訪れたのは、死後10日も経った1月5日で、前夜の雪が30センチも積もった日であった。麓の百楽の市

場を8:59に出発し、2時間余り掛けて歩いて到着した。

死者は、正面の入口突き当たりの壁に、丸木を組んで拵えられた棚に、頭を左向き（台所側）に向けて寝せられている。死後、家の主人は誰よりも先に犬、豚、牛のどれでも1頭殺して、亡くなった人にお供えしなければならないと言う。この死者の場合は、10日間毎日朝、昼、晩の3回ご飯のお供えをし、家の人たちと集まった親戚の人たちが1人、1人順番にスプーンで死者に食べさせ、家や親戚の女たちは泣き歌を歌った。頭の下には今朝供えられたご飯が、頭の上には、焼酎、ご飯、豚肉、紙銭などが入れられたイールックハン（衣禄飯）が供えられている。これは、毎日供えられたご飯が蓄えられた物である。葬式の日を吉日を選んで行われるために10日も経ったのだという。



死者への供儀用の黒い子豚（左の袋の中）

11:26 親戚の人たちが、女性の一人を先頭に、カイン（芦笙）とラッパの楽隊、浅底箆に豚の切り身を載せたご飯3碗、袋に入れた生きた黒い子豚1頭、鶏の肉を載せたご飯3碗の順列で田の中の道を進んでくる。家に到着すると、先頭の女性たちが家の中に走り込み、全員が遺体に取りすがって泣きながら歌っている。「お母さん あなたが亡く

なってとても悲しい わたしたちは この家に来る道がなくなる もうこの家に来る縁がなくなる」と歌っているのだという。この泣き歌のことを「ニャー」とも「ゴァー」とも呼んでいる。

11:45 やがて、正面入り口前の庭で奏していた楽隊が、供え物とともに入り口に進んでくる。カインを吹いていた中の2人と、供え物を持った人が家の中に入る。笙の2人は吹きながら踊って、再び外に出て吹き続ける。供え物は、遺体の前の土間に置かれた円卓の上に供えられる。

11:49 泣いていた最後の1人（故人の弟の娘）が遺体から離れて、ニャーが終わる。

12:03 再び、次の女性の集団が入ってきてニャーが始まる。

12:06 親戚からの供え物が家の中に運び込まれ、遺体の前の土間に置かれた円卓の上に置かれる。豚肉の載ったご飯、紙銭、焼酎が供えられ、線香が立てられる。

12:26 鶏の載ったご飯、トウモロコシ、焼酎などが供えられる。

12:39 次の女性の集団が入ってきてニャーが始まる。



死者への供儀用の黒い子犬

12:41 家の入り口左側の外に繋がれていた黒い子犬の首から、家の中の中央の柱（主人の柱）に取り付けてあった太鼓を通して遺体の頭部まで、一本の白い木綿の糸で繋がれる。死者が受け取ったら白い木綿糸を切断し、外で黒い子犬を打ち殺して、出席者全員で煮て食べる。黒い子豚も同様に打ち殺して皆で食べる。

今回の死者は事故死であったので、参加者は左手指に赤い布を巻き、芦笙や太鼓にも赤布が付けられている。これは死者の霊が取り付くのを防ぐのだという。自然死の場合はこれはない。

5 1周忌と豚の食習俗

広西壮族自治区那坡県城 鎮達腊村達腊屯（彝族）

旧暦12月26日は、47歳で交通事故で亡くなった人のコオロイパイ（1周忌）の日で、それを早めて行った。バーパン（生きたままの黒の子豚1頭）、ミャアパン（糯米のご飯）、ジーバン（焼酎）、パウバン（爆竹）、チェファンバン（爆竹を鳴らすこと）、イガウイパイ（土地を買ってやること）、カンダウイパイ（土地を買ってやること）、ペア（お金）を家のナーハン（先祖の棚）にお供えして、その後それらを持って墓参りをする。墓では、ワア（豚）を殺し、ワアウー（頭）とワッキー（後ろ足）2本をお墓にお供えし、その残りは料理をして全員で食べる。終わったら爆竹を鳴らして墓を引き上げてくる。墓に供えたワアウーとワッキー、ミャアパン（糯米のご飯）、ジーバン（焼酎）などは、家に持ち帰り、ナーハンにお供えする。ナーハンには、その他に殺された雄の鶏とその生血が供えられる。その前で、道公がお経を唱える。10分程度で読経が終わり、鶏はナーハンから下ろされ羽毛を抜かれ、内臓が取り除かれ、再びナーハンに供えられる。また、内臓も鉢に入れられ解体した刀とともに供えられる。



先祖棚に供えられた豚の頭部と尻尾

6 新築落成と豚の食習俗

広西壮族自治区那坡県百都郷（壮族）

新築が成り、いよいよ新居に入るといふ日に親戚を招いて豚を殺して祝いをする。先祖棚には豚の頭と尻尾を供え、家の正面の入り口には死んだ悪霊が家の中に入らないように追い払うために、敷居の外側の豚の生血を撒く。こうすれば、死んだ悪霊は血を食べて家の中に入らずにここで引き返すのだという。生血は「代代興旺祖宗得食」といって、先祖の食べ物であるので、生血でなければならない。



先祖棚に供えられた豚の頭部と尻尾（拡大）

7 病気魔払いと動物供犠

(1) 雲南省文山壮族苗族自治州富寧県上岩村庄宝屯（白苗族、自称モン族）

この村では、家の入り口の梁には、ジョゲン（困草：注連縄）、ダウラー（赤い布）、ダウ（鋸歯文に切った紙）が下げられている。これを下げることの意味は、良いものは入って再び外に出れないように、邪悪なものが家に入らないようにするものであるという。



新築の家の出入りに塗られた豚の生血

(2) 雲南省文山壮族苗族自治州広南県八宝鎮百樂辦事処龍達村（白苗族，自称モン族）

ここでは、1年間の運が良くなるようにと言って、正月1日に家の入り口にタオリ（赤い布）を下げる。これを掛けたら、女性は3日間これの下をくぐって外から中に入れない。女性がくぐると不幸になる。



玄関上にかかげられた黒犬の頭

また、家人が病気になったときは道公を頼んでオーネン（鬼をつかまえて外に出す）という儀礼をする。道公が病気の程度を見て、黒い犬か赤い雄の鶏を殺すかを決める。犬を殺した場合は、頭は口を開けて玄関上にかかけ、足は家の四隅に下げる。生血は玄関の柱や周囲に塗り付ける。鬼が家の中から出ないときは四隅に足を立てる。

(3) 雲南省広南県八宝鎮百樂辦事処那讀村（白苗族）

ここでもオーネンを行う。実見した例は病気がちの子どもを対象にした儀礼で、赤い雄の鶏を籠に閉じこめ、祭壇を作り、道公が馬に乗って天に昇り、病気を与えている鬼と子どもの魂を家に迎えてきて、鬼をもてなし病気にさせた原因を聞き出し、父親の左手首と首周りには、祭壇に供えられていた赤い布の半分を裂いて巻き付け、後の半分は山に持っていき岩に巻き付ける。子どもには、祭壇に供えられていた針に通した赤い糸を背中に縫い付け、針も糸も半分は切って山に持っていき岩に巻き付ける。手首や首、背中の赤布や赤糸は、魂が抜け出たり、鬼が入ったりしないように守護し追い払うのだと言い、半分の布や糸には鬼が付いているので山に捨てるのだと言う。最後に、刀で柱や壁を叩いたり、火を吹きかけたりして鬼を追い出す。最後に、赤い雄の鶏を籠から出して外に放してやる。

8 黒豚と白豚

広西壮族自治区那坡県百省郷百坎村古岑屯（苗族）

黒い豚と白い豚を飼っている。正月に殺すのは黒い豚で、白い豚は販売用として市場に出すものであるという。もともとは全部黒豚であったが、黒豚は1年飼育しないと大きくならないので、6年くらい前から白い豚を飼うようになった。今でも黒い豚を飼っている理由は、正月などの儀礼に使うためと、ラードが多く取れるからだという。

9 雄豚の去勢と雌豚の卵巣摘出

広西壮族自治区碩龍県碩龍鎮碩龍村碩龍農貿市場（壮族）

12月21日の農貿市場は、白い子豚の売買で賑わっていた。雄の豚は去勢の技術が簡単なので、



卵巣摘出作業

払っている。

生後1ヶ月ぐらいの時に自分の家で行うが、雌豚の卵巣摘出は市場で専門の技手に行ってもらう。建物の柱に平板を1枚斜めに立て掛け、それに両後ろ足を括った雌豚を逆さに吊り下げ、胸の周りを一回り縛って下腹部を切開し、卵巣を引き出し糸で縛って切り取り縫合をする。

「中国動検」の名札を付けた獣医のような人に、注射をしてもらい、耳輪を填てもらって、1頭当たり4元を支

Ⅲ 南九州及び南西諸島の豚食の概観と比較

まず、今回の事例からどのような機会に豚を殺しているかをみると、年越しの場面、正月2日、結婚式、葬式、1周忌、新築落成の例をあげることができる。ここにはあげなかったが、子供の誕生、名付けの祝いなどにも殺し、食べられることが確認できる。

以下、いくつかの点について南九州及び南西諸島との比較検討を加えてみたい。

1 屠殺の技術

まず、屠殺及び解体の技術についてみてみたい。まず、その豚を殺す技術的な特徴をいくつかみていこう。ほとんどの事例が示すように、刀による頸部の刺殺である。これは生血を利用することと関わる問題であろう。ただ、事例2の(2)や事例4の(2)の白苗族のように撲殺がみられ、どちらが古い方法であるか、あるいは儀礼性（供犠性）と関わる方法であるかは、さらに事例の積み重ねが必要であると考えられる。

次は、体毛の除去の方法である。ほとんどが、熱湯を掛けて刀で剃り落とす方法を採用している。しかし、事例2の(1)と(2)の白苗族は、「火で焼いて剃って汚れも落とし解体する。この方法が最も古いやり方で、ブラチョンは湯を掛ける方法でやってはならない」といい、火で焼くことが元来の方法であり、防災的性格を持つ儀礼に関しては湯を掛ける方法は禁忌としていることが分かる。この処理の方法は、奄美における豚や猪の毛の処理方法や、南九州の猪の毛の処理方法として、毛を焼く方法を古い技術とすることと共通している。

さらに、注目すべきは、骨の割り方であろう。事例4の(1)の背骨と足の骨を二つに割るのは、髓を食べる技術として極めて有効な技術であると思われる。骨にこだわり、意味付けをする食習俗は、南九州や奄美・沖縄諸島で「骨齧り」や「骨噛み」、「ワンフニ（豚骨）」などの料理名で知られる^{*2}。また、獣皮を食べる食習俗は、南九州や奄美を含めた地域が獣皮を食べる食習俗を持つこととも共通性を持つ問題を含んでいる。

2 正月豚

次に、奄美諸島や沖縄諸島の豚肉食との比較をする上で最も注目すべきは、正月を迎えるに際して豚を殺す「ショウガツワー（正月豚）」の問題であろう。まず、事例1の18例の特徴

をいくつかあげてみたい。事例1の(8)の壮族の例を見ると、「クワァ（越す）ムー（豚）チン（新しい）」という呼称にも見られるように、年を越して新しい年を迎えるための豚であることは明らかである。事例1の(13)の白苗族も「トンポチェノー（年越しの豚）」も同様である。さらに、事例1の(17)の過山瑶族の「タイトンクーニャン（豚を殺さないと年を越せない）」という認識は、こうした認識を明確に示すものである。つまり、年を越し新しい年を迎えるためには豚を殺し、先祖に食べさせ、自分たちも食べなければならないという認識である。

こうした認識は、奄美諸島や沖縄諸島においてもほぼ同一の認識として認められるものである^{*3}。例えば、大島郡住用村では年末に殺した豚を年の晩に豚骨料理にして食べるが、これをトシトリフネ（年取り骨）と呼び、年取り餅などと同じように位置付けられ、これを食べなければ新しい年を取ることができないと強く意識されている。事例1の(1)の壮族が年の晩にパイクアツ（肋骨付き肉）と野菜の炒め物を食べている例や、筆者が報告したラオス・ルアンパバーン県ロンラオ村のモン族が、年の晩にツッター（肋骨）、ガータオ（背骨）などの骨付き肉とゾンツアー（内臓）と高菜を塩味で炊いたトンプアイと呼ぶ豚骨料理を食べないと正月（新しい年）が来ないという例などは、奄美諸島や沖縄諸島の例と極めて強い類似性を示している。

しかし、その目的をみると若干の差異がある。ここであげた中国の事例は、いずれもが先祖の霊に供える、もしくは食べさせるということが強く意識されている。特に、事例1の(18)の過山瑶族の「先祖は豚を殺した日に帰ってきて、供え物を食べたら直ぐに帰る。もし供え物をしないと、鬼神となった先祖が戻ってきて、家の者を病気にしたりして、家に悪いことを起こさせる。また、お供えしたものは家の者だけで食べるもので、他人に与えるとその家の運が逃げていく」という例は、注目すべき内容を含んでいる。つまり、先祖に豚を中心とする供物を供えないと、不幸が訪れ、他人に与えると衰運になるというのである。しかも、先祖が「鬼神」となって訪れ、災悪をもたらすという認識を持っており、そのご機嫌を取るために供物を捧げ、子孫だけで食べ尽くすというのが根底にある目的なのである。

これに対し、奄美諸島及び沖縄諸島にみられる年の晩の豚骨料理の食習俗には、先祖にお供えするという意識はあっても、鬼神となって帰ってくる先祖という意識は認められない。そこにあるのは、柳田国男が説いた子孫を温かく守護し、盆と正月には温かく迎えてくれる子孫の待つ故郷へ帰ってきて、子孫と共に目出度い時を過ごすという観念である。

ただ一方では、名越左源太の『南島雑話』が記録している中に、「呪詛 親の子にたゝると云、舅姪にたゝると云ふ甚だしき雑説あり。其災禍には、牛・馬・豚・家鶏・羊を殺分に限りて、村を賑わせば、おのづからたゝり去ると云ふ」とあり、この「親」は死んでいるという解釈が十分に成立するところから考えれば、ここに先祖が子孫にたたるという先祖観がみてとれる^{*4}。

また、不思議なことに、薩摩、大隅、種子屋久、三島、トカラ、奄美、沖縄の地域には、年の晩から正月に掛けて、恐いものが来るとか、鬼が来るとか、火事が出るとか言って、家の周囲を竹壁や柴で囲ったり、家からの外出を禁じたり、魔除けのニンニクを身に付けたりする。

こうした年の晩に、この地域ではワンフニ（豚骨料理）を食べて身を固め（力を付け）て、新しい年を迎えようとするのである^{*5}。この両者の違和感は一切どういうことなのであろうか。それを解く鍵が、事例1の(8)の過山瑶族の正月前の豚の食習俗と先祖観に隠れているのかも知れない。つまり、そうした視点で南九州から南西諸島にかけての地域の正月豚の食習俗、ないしは先祖に対する観念を捉え直してみる必要があるのではないかと考える。つまり、これまで主に防災的な側面で捉えてきた南九州から沖縄諸島にかけての動物供犠を、先祖霊の供養という側面から再検討することが迫られる。

3 防災儀礼と豚

事例2の(1)や(2)は、白苗族が正月2日に行う、豚の発育の不良を防ぐための子豚の供犠である。これは、家の周りを左回りに3回引き廻し、家の中の中央の間（祭壇はないが先祖を祀っていると意識している空間）で撲殺し、先祖に供えている。しかも、2の(1)は、子豚を殺す時には決して漢民族の言葉を使用してはならないといい、民族のアイデンティティを強く意識する場ともなっており、先祖の機嫌を損なうことがないようにしようとする配慮がなされている。これは、この儀礼が極めて伝統的方法を踏襲するという意識の中で行われていることを明確に示している。さらに、その肉切れを家の外に持ち出すことを禁じ、家内の者で食べ尽くすことが厳格になされていることが分かる。

こうした供犠する動物を引き回す例は、奄美の場合にもみられる。名越左源太の『南島雑話』には、「ノロクメ祓図 薄葉もち 自ら誤て火を出し、隣家に及べば、ノロクメ共、祭をなし、火を出せし者トガヲトシと云て、牛一疋を火出せし者村中を牽回り、後に牛を殺し、村中の人ふるまふ事なり。火を出せしもの、首させし草をまとひ、牛の首にも其草をまとふ」とあり^{*6}、大島郡宇検村阿室では、大正五年の大火の時に、火を出した家の者に風呂敷を被せて、ウワントネ（上のトネヤ）から浜まで村中を牛を牽き廻せた。村の辻々では、青年たちが牛を棒で叩き、浜まで牽き出したところで叩き殺して料理し、村中で食べ尽くしたという^{*7}。また、奄美でも供犠した動物は食い尽くすということが重要な要件であった。同じ『南島雑話』は、「地カタメ 地がためとて、能呂久米どもの祭仕舞、村はずれの木に図のごとく牛の腰骨又は足骨をさげ置く。其肉は村中男女悉く喰懸て如图」とか、「大和浜の能呂久米のすゝめ祓の祭文、又家内安全の祓に唱祭文に曰く。（中略）（すゝ）め祓牛骨附肉は、村中喰忌す。其祭詞みまふらちみしより、将来かなし、国が神かなし、島が神かなし、はこ草ましものたち、ものししことこふに、はんなけくんみしよれ」とあり、「村中男女悉く喰」、「村中喰忌す」ことが必須の要件であったことを示している^{*8}。これは、ラオス・ルアンナムタ県パイヤロアン村やヤールー村、スイ村のアカ族が行う、種播きに先立って村を清めるミシヨロの祭りや、流行病が流行ってきた時に行う防災儀礼であるアクウトーの祭りにみられる黒い豚や黒い犬の供犠の場合も、肉はその場で食い尽くし、残りの肉を家に持ち帰ってはならないという禁忌を厳しく守っている。共食することが重要な意味を有しているのである^{*9}。

次に、病気の魔払いの事例についてみてみたい。事例7の(1)、(2)の白苗族は、豚ではないが

黒い犬ないしは赤い雄鶏を供犠している。特に、犬を供犠した場合は、その頭を入りに口を牙をむいた形にして掲げ、4本の足は家の四隅に下げ（病気を引き起こしている鬼が家から出ないときは足を立て）て、生血は玄関の柱に塗る。これは、家を犬の体に見立て、その体内に病人や家人が閉じ籠もり、鬼から身を守るということである。

これと共通する儀礼が、ベトナム北部エンバイ省ムーカンチャイ県チュンラー村のモン族でも行われている。それは、家人が病気になったとき、山羊を供犠して家人で食べて、家の入口側の棟木に頭、反対側に尻尾を、4隅の軒先に4本の足を立て中に閉じ籠もり、他家の人間の出入りを拒絶するというものである。供犠する動物が山羊であるのは、山羊が家畜でありながらも山で生活をしているので野性がより強いので、鬼が恐がるのであるという^{*10}。

ただ、事例7の(3)の白苗族では、鬼を招いて鶏（道公でない家では殺した豚）を供物として供え、もてなしをして鬼に帰ってもらうという儀礼が認められる。ここには、鬼に対する供養の観念が窺える。おそらく、事例7の(1)、(2)についても、同様の儀礼が行われ、殺した後にそうした儀礼がついているものと考えて良いであろう。

これに対して、奄美や沖縄諸島の場合はどうであろうか。『南島雑話』は、個人的な家人の病気平癒の供犠として「先第一家内に病者あれば、医師は次として直ちにユタを頼んで咒をすれば、ユタいへるには、此病何々の障ありて何等を取り殺すべしとのことなり、依て豚を殺し身替に立てずば、病快気すべからずと云へば、愚民驚きて其意に同じ豚を殺し、一家親類を呼んで振舞、片はユタに礼物として遣す事なり云々」と記している^{*11}。また、大島郡瀬戸内町請島でも病人の身替わりとして、馬、牛、豚、山羊、鶏などの動物が殺されていた。つまり、ここで強調されてるのは、豚を身替わりに殺すということであり、病気のもととなる鬼を供養し、脅迫、拒絶しようとする先の白苗族やモン族の例とは差異が感じられる。

今回の調査においては、集落全体を対象とした防災的な豚の供犠を確認できなかった。これに対し、奄美、沖縄においては、先に示した『南島雑話』の「地カタメ」のように動物を殺し、村外れに足や、腰の骨付き肉を下げ、村中の男女で肉を食い尽くし、文字どおり「地（大地）」を「カタメ（固め）」る、つまり、強固な集落を再生し、病気や凶事を引き起こす恐い者が集落に侵入するのを防除するための民俗伝承が聞かれる。集落の入り口や浜の入り口に注連縄を張り、それに頭骨や肩胛骨などを下げるのであるが、それにダラ（棘のある木）を一緒に下げて、病気等が侵入しないようにするのだというのである^{*12}。

この下げられる骨がどういう目的を持つものなのかということについて、これまで筆者は、骨の持つ生命が宿るものとしての力にのみ注目し、それに排除の機能があると考えていたが、今回の調査結果を考慮に入れると、集落に侵入しようとする者に、それらの骨や肉などを入り口で食べてもらって、そこから引き返してもらうことで侵入を防ぐと考えることも必要ではないかと考えるようになった。そうした考えをとれば、例えば正月の門口の注連縄や門松などに、蜜柑や里芋などの食物などを供えるのも、今までの年神の依代としてのみの門松論の再考にもつながるのではないかという期待がある^{*13}。そのことは、先にあげたラオス北部のルアンナムタ県パイヤロアン村やヤールー村、スイ村のアカ族の例が、集落全体を対象とした防災的な黒

い豚や黒い犬の供犠が明確に認められていることから、十分に可能性を持つと言ってよい^{*14}。

4 人生儀礼と供擬

先ず、結婚の場における豚の供犠について触れてみたい。事例3の(1)、(2)の壮族も、3の(3)の過山瑶族のいずれも、花嫁側では新郎側から贈られた一頭の豚を殺して、頭や尻尾、内臓、生血などを先祖に供えて、結婚生活の安寧をお願いする。新郎側でも同様に花嫁側から贈られた豚を供犠する。こうした事例は、ベトナム北部ライチョウ省ホントー県ホントーマン村のザオ族でもみられ、花嫁側でも新郎側でも先祖を祀る棚の前で供犠した豚1頭を供え、その結婚がうまくいくかどうかを先祖に伺い、その結婚生活の幸福をお願いする。その後、その豚は参列者で食べる^{*15}。また、ラオス北部ルアンナムター県シン郡パイヤロアン村のアカ族では、花嫁が新郎の家に入ると、一頭の豚が殺され、サッセホ（肝臓）を見て、その結婚の吉凶の占いを行う^{*16}。

しかし、こうした婚儀に於ける豚食の習俗は、奄美、沖縄では聞かない。僅かに、江戸時代末に鹿児島県の北薩摩の大口で、結婚式の場に豚肉が饗されたことが分かっているが、それがどのような意味を有しているかを窺い知ることはできない。

次に、葬式の場に於ける豚の供犠についてみていきたい。事例4の(1)の壮族のピータイ（葬式：鬼・死んだ）は実見に基づく報告である。白豚ではあったが、喪主はもちろん、死者の生家、娘の嫁ぎ先から豚が供えられ、しかも1頭丸ごとお棺の前に供えられる。さらに、豚の内臓でサンピン（山珍）やハイウェイ（海味）の作り物を作って供えられる。そして死者に受け取りをしてもらった後、お棺の前で首をはね、お棺の脇で解体し、参列者で食べられる。さらに、供えられた豚肉を中心とした供え物は壺に詰めて死者の足下に埋められる。また、頭も墓場まで持っていかれ、埋葬中穴の脇に供えられているのである。

また、事例4の(2)の白苗族の葬儀も同じく実見に基づく報告である。4の(1)の壮族と異なるのは、死後10日間も期間をおいて葬儀が行われていることである。その間、死者に対して朝・昼・晩3回、ご飯のお供えをし、家の人たちと集まった親戚の人たちが1人、1人順番にスプーンで試写に食べさせ、家や親戚の女は泣き歌を歌っているのである。この事例は、大島郡の喜界島で死後1週間、青年達が風葬墓の前で死者に食べ物を食べさせ、三味線を弾き歌ったという伝承を思い起こさせる。これは、日本列島はおろか、奄美、沖縄でも葬式の事例としては特異なものであるが、こうした白苗族の習俗を比較の対象として検討を加えてみることで、新たな捉え方ができるのではないと思われる。

さらに、葬式の場における「泣き歌」の習俗も、大島郡の徳之島に見られるものであり、その比較が迫られる。

一方、豚の供犠についても若干の差異が認められる。それは、黒い豚（黒い犬・赤い雄鶏も可）が、生きたまま死者に贈られるということである。それらが家の外に置かれ、白い木綿糸をとおして、しかも太鼓を介在して贈られることである。白い木綿糸あるいは白布を例の通り道だとする例は、ラオス北部ルアンパバーン県ロンラオ村のモン族にもみられる。彼らは、新

しい年を迎える前の日、家の入り口で先祖の霊を家に招く。そのときにその入り口から屋根裏、棟木を伝ってタータイ（先祖を祀る棚）まで、白い木綿糸3本あるいは白布を引き渡す。家に来た先祖の霊は、この糸や白布を通してタータイに収まるのだという^{*16}。

ここで注目しておきたいのは、太鼓を仲介にしていることである。この白苗族の人々は、太鼓は葬式の間でしか鳴らさないものであるといい、それ以外の場で太鼓を鳴らすことを厳しく禁じている。これは、太鼓が死者の霊とこの世のものと交感の機能を持つものであることを示している。したがって、黒い豚（黒い犬・赤い雄鶏も可）が、この白い木綿糸を伝って死者に贈られるのである。死者が受け取ったことが確認されると、撲殺されるのである。肉は血と共に大鍋で煮られ、参列者に振る舞われる。

こうした、葬儀の場で豚あるいは山羊が殺され共食される例は、奄美、沖縄諸島でもいくつか知られている。例えば、山下欣一の報告によれば、大島郡瀬戸内町与路島では、「人の死後、ミズノトが廻ってくる日にユタはミツタテという死霊を呼んで話をさせる祭りをした。（略）庭の表に大鍋をすえるカマドをつくって、山羊を殺して煮る。そして、家のヤーデグチ（家出口）に一メートル位の棒を二本立てて、これにムシロを下げ、これに山羊の頭骨の鼻の穴にひもを通したのと、足を四本と米五合を袋に入れてぶら下げる。ユタは、（略）家の内側から表に面して座り、ススキやみかんの枝を手に持って、呪詞を唱え、神がかりして死霊を呼び、死霊の口を語り、死霊を後生に送る。（略）この日は、家の内外を新しくするといい、海岸から白砂を運んできて、敷きつめたりする。山羊の肉は、塩だきで、そのミツタテの夜までに後に残さないで全部処分すべきだといい、全部をなんらかの方法で食べつくすものであった」という^{*17}。家の入り口に山羊の頭と4本の足を供え（これは山羊1頭を供えているという認識であろう）で、死者の霊を呼び戻してもてなし、後生へ送るのである。注目すべきは、供犠された山羊が家の出入口に掛けられていることであろう。これは、やはり悪死霊を家の中へ入れないようにしようとする意識が働いていることを示している。つまり、出入口で悪死霊をもてなし、立ち去ってもらうという意識でもある。また、ここでも供犠された山羊は、皆で食べ尽くすことが条件となっている。

また、岡本恵昭の報告によれば、集落は特定されていないが、沖縄・宮古島諸島では、「死者の長老たる格にあつて、老死したる場合、「ダヒワー」という、豚を殺して共食するという「いけにえ」と、「共食」の二通りの儀礼があつた。「ダヒワー」について、里や親戚の女たちが料理し、骨は骨、「血いりちい」と呼ぶ血や、肉や骨入りのスープなど、また、塩のみの味で煮炊きした、三枚肉の皿、等々の献立の変化はともかく、数々に盛られ、死者に供養し、泣きながら食べた」という^{*18}。ここでは、豚の供犠とその共食が死者への供養として強く意識されていることが分かる。

さらに、沖縄県八重山郡の与那国島では、現在でも葬儀の場で豚が供犠され、参列者に振る舞われるという^{*19}。このことについては、具体的な報告例がないので検討のしようがないので、その存在のみを指摘するに留めておきたい。

5 建築儀礼と豚

事例6の壮族は、先祖を祀る棚の前に豚の頭と尻尾（豚1頭を）を供える外に、入り口の敷居の外側に生血を塗ることである。この目的は、死んだ悪霊に入り口でその地を食べさせて引き返させ、結果的に侵入を防御することにある。血は食べ物としての豚そのものであることを示している。

こうした建築儀礼における生血を塗る習俗は奄美諸島でも行われていた。柏常秋は『続沖永良部島民俗誌』の中で「新築の際、柱が全部立った時にハヤタテエ（柱立祝）という小宴を行った。この時に鶏を料理する慣例であるが、鶏を屠る時にはまず肉冠を刃物で傷つけて血を出し、その血を四隅の柱に塗った。これは妖魔退治の呪法である」と報告しており、鶏ではあるが柱に生血を塗ることが、「妖魔退治の呪法」であるとしているのである^{*20}。これは、赤い色に妖魔を退治する力があるという解釈をされがちであったが、事例6の例に認められる悪霊をもてなし、立ち去ってもらうという観念が認められるのではないのか。これもまた、資料の読み直しを迫られる問題であることを提起しておきたい。

6 儀礼と黒豚

次に、殺す豚の色についてみると、事例1の(1)の苗族がいうように「黒い豚」でなければならないという。これは単に以前には黒豚しかいなかったからというのではなく、まさに「なければならない」のである。事例4の(2)の白苗族は、葬式の場で死者に贈られ生者が共食する豚はもちろん、犬であっても黒犬でなければならないという。また、事例7の(2)や(3)の白苗族も、病気の魔払いに黒い犬を限定的に用いている。特に、事例2の(1)と(2)の白苗族が示すように「白い子豚を殺すと不幸が来る」といっていることを考えると、「白い豚」は排除し「黒い豚」を意識的に選択しており、「黒い豚」は儀礼性を持つものとして考えるべきであろう。奄美諸島の沖永良部島や与論島では、シルワァーが股を潜ると人が死ぬといわれ、極端に忌避される^{*21}。こうした「白色」を忌避し、「黒色（ないしは赤色）」を優先色とする色の価値観にもその共通性を指摘できる。

しかし、事例4の(1)の壮族のようにすでに白い豚に変化していたり、事例1の(2)の藍瑤族のように元々は黒色の豚であったが、今は白い色であったりする例が見られ、今後こうした傾向は強まって行くであろうということが容易に推測できる。

一時期白い豚に押され消えかかった鹿児島黒豚の名で知られる鹿児島の黒い豚も、また、復活が取り組まれている奄美の島豚や沖縄のアグーなどの在来の黒い豚もこうした東南アジア大陸部や中国南西部の豚文化の背景を考えなければならないということである。

IV 終わりに

中国広西壮族自治区及び雲南省の一部の調査結果と、これまで奄美、沖縄で蓄積された研究成果及びラオスで蓄積した資料との比較をしてきた。その結果極めて強い共通性を指摘することができ、その文化的なつながりの深さを確認できた。さらに、奄美、沖縄のこれまでの資料の読み直しの必

要性が迫られる問題も明らかになった。いよいよ、両地域の資料の蓄積と分析を今後重ねて行かねばならないという思いに駆られている。今回、研究の機会を与えて頂いた財団法人味の素の文化センターと鹿児島県歴史資料センター黎明館に対し心から感謝の意を表したい。

追記 本文は、表題にも記したように（財）味の素の文化研究センター第13回食文化研究助成（研究期間平成14年4月1日から平成15年3月31日）の成果報告書として、平成16年3月に同財団に提出したものである。しかし、同報告書は印刷刊行されていないため、今回同財団の許可を受けて、若干の加筆修正を加え、現地で撮影した関連写真を付して本誌に掲載するものである。掲載を快諾いただいた同財団に心から感謝申し上げたい。

[注]

- ※1 ①川野和昭「正月儀礼食考（二）－豚骨料理食習俗をめぐって－」・『稜雲』鹿児島県立甲稜高等学校刊 昭和六三年三月
- ②川野和昭「ラオスの少数民族の暮らしと文化－南九州との比較から－」・『黎明館企画特別展 海上の道－鹿児島の文化の源流をさぐる－』鹿児島県歴史資料センター黎明館刊 平成七年三月
- ③川野和昭「『カタギイテゴ』の作り方と分布と文化の地域性」・『黎明館調査研究報告』第一二集 鹿児島県歴史資料センター黎明館刊 平成一一年三月
- ④川野和昭「奄美・沖縄とラオス・タイ北部の少数民族の動物供犠－比較民俗学と民俗の地域性－」・『黎明館調査研究報告』第一三集 鹿児島県歴史資料センター黎明館刊 平成一二年三月
- ※2 川野和昭前掲書①
- ※3 川野和昭前掲書④
- ※4 名越左源太『南島雑話2 幕末奄美民俗誌』国分直一・恵良宏校注 平凡社 1984年
- ※5 川野和昭前掲書①
- ※6 名越左源太前掲書
- ※7 川野和昭前掲書④
- ※8 名越左源太前掲書
- ※9 川野和昭前掲書④
- ※10 2000年11月に日本科学財団の研究助成を受けて、川野が行った現地調査による。
- ※11 名越左源太前掲書
- ※12 川野和昭前掲書④
- ※13 川野和昭「門松考－依代説再考－」・『稜雲』鹿児島県立甲稜高等学校刊 昭和五九年三月
- ※14 川野和昭前掲書④

- ※15 ※10に同じ
- ※16 川野和昭前掲書④
- ※17 山下欣一『奄美のシャーマニズム』弘文堂刊 昭和五二・基礎論文「沖永良部島における創世神話と動物供犠」・『南日本文化』五号・鹿児島短期大学南日本文化研究所・一九七二年
- ※18 岡本恵昭「葬送習俗「魔よけ」」・『南島研究第』一九号 昭和五三年
- ※19 2001年の現地調査中に葬儀が行われ、その参加者から「葬儀の参列者に豚の肉が配られた」ということを聞くことができた。残念ながらその詳細は知ることが出来なかった。
- ※20 柏常秋『続沖永良部島民俗誌』柏常秋著書刊行会・一九六五年
- ※21 沖永良部島については、出村卓三氏のご教示による。与論島については、栄喜久元「与論島の動物と人間の交わり（三）」『鹿児島民俗』第116号 平成11年と、川野の現地における菊千代氏からの聞き書きによる。

